



## 大森地区・中州・プロジェクト

堤 雅彦 (つつみ まさひこ)

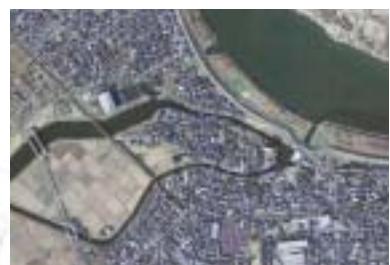
東京電機大学 情報環境学部 情報環境デザイン学科



近年、既成市街地の衰退が進み地方の衰退や格差社会という現象が起こっている。人は次々と都心へと移住し、地方の町は廢れていくばかりである。急速に時代が変わるにつれその町の機能も変化し、土地の特色や歴史が失いかけられている。

千葉県北西部に位置している印西市木下。ここも時代に取り残された街である。かつては利根川を利用した船の運搬が発達しており、水と共に暮らしてきた街である。時代の波に流されてしまった

本計画では木下駅北口にある弁天川と手賀川の二つの川に挟まれた中州を敷地対象とし、木下の魅力を引き出す計画として「水のネットワーク」を張り巡らせ、人、モノ、水が縦横無尽に交差し活性化を促すのが目的である。



**[講評]** 利根川に注ぐ支流の中州に、川を生かした新たな街を作る計画である。模型を見ると、親水性のある街並に緑のリボンのようなたゆたう歩廊と楕円形の施設が気持ちよさそうな印象を受ける。印西市木下地区は筆者も仕事で土地勘のある場所であるが、高い堤防で街が利根川と遮られるという、関東平野の大きな河川特有の風景となっている。

衰退する街を、河川の水と緑、そこに集まる鳥や虫、広大な風景という豊かな自然を生かし、街の再生を図りたいという作者の意図には共感する。その手法は既存の街に隣接して中州という親水性を生かし、既存の鎮守の森の緑などは残しながら新たな街を作る。川と関連づけら

れた交流施設を設け、堤防につながる持ち上げられた緑の歩廊で街とつなぎ人々の暮らしと川とが結ばれた川辺の豊かなコミュニティーが形成される。………魅力施設と動線でつなぐというややオーソドックスな手法である。提案が街スケールでとどまっており、川と家、人々の暮らしの具体的なイメージが伝わってこない。また、緑豊かな環境とは裏腹に周囲との関係が弱く、開かれたコミュニティーとしての印象が弱い。水を生かして人の流れを呼び込んだり、通り抜けていくような形態や動線計画によって川や周辺とつながってゆくハウジングシステムや街のストラクチャーがより具体的に考案されればさらに良くなったと思う。

(審査員：柳田富士男)